

通称《虎に乗るディオニュソス》モザイク（ナポリ国立考古学博物館）
をめぐる一考察 —ポンペイ、「ファウヌスの家」の饗宴空間—

野々瀬 真理（東北大学）

通称《虎に乗るディオニュソス》は、ポンペイの「ファウヌスの家」の饗宴の間（トリクリニウム）に設置されていた、前2世紀から前1世紀前半の床モザイクである。有翼の童子がたてがみのあるトラ柄のネコ科動物に騎乗し、左手で手綱を握り、右手に酒杯（カンタロス）を抱えている。童子の頭と動物の首を飾るキツタ、地面に置かれた酒神の杖（テュルス）、酒杯は、童子が酒の神ディオニュソスに関連した存在であることを暗示する。同様のモチーフを備えるモザイクは、ギリシアのデロス島の邸宅からも発見されているが、こちらは童子ではなく青年で、左手でテュルスを持ち、酒杯は地面に転がっている。

これらの有翼の人物の図像解釈として、当初もっとも有力視されたのはディオニュソスであり、酒神がインド遠征から帰還し凱旋行進を行った様子を表しているとされる（Leonhard 1912）。ただし、酒神が翼を持つ描写はきわめて作例に乏しく、有翼で表されるに至った文学的典拠は曖昧である。その後の多くの研究者は、これらの有翼の人物を凱旋行進に参加した酒の精霊（ダイモン）の一種とみなしている（Rizzo 1929, De Vos 1979）。

酒神の要素と翼を併せ持つ点に関して、より説得力を持ったのはエロスとしての解釈である。それによると、これらの有翼の人物は愛や酒を主題としたヘレニズムの美術と文学に影響を受けて描かれた（Andreae 2003, Kondoleon 2019）。ヘレニズムのエロスは童子姿で頻繁に表され、葉冠をかぶりライオンやヒョウに乗り、ディオニュソスの行進に参加していた。この神はまた、愛の矢で他の神や英雄を苦悩させる危険な存在でもあった。酒や道具を使ってライオンを懐柔する様子を描いたエピグラムは、地中海世界で広く人気を博し、同主題のモザイクはポンペイやローマで発見されている。

発表者は、「ファウヌスの家」とデロス島のモザイクの有翼の人物をどちらもエロスと解釈した上で、特に前者を支配者としてのエロスであると考え、デロス島の青年が、杖を掲げ神としての権威を強調した姿で表される一方で、「ファウヌスの家」の童子は、酒杯を抱きネコ科動物の手綱を握ることで、ライオンや英雄を酩酊させて服従させる、小さな制圧者として描かれている。また、童子や青年が乗るネコ科動物のような、複数の種の特徴を混ぜ合わせた架空の動物は、異国の情景を表すものとしてアテナイの演劇作品に登場し、ヘレニズム以降の文学と美術においては権力や異国趣味を象徴する要素として受容されていた。

「ファウヌスの家」の童子のモザイクは、もう1つのトリクリニウムに表された、力の三すくみの構造を寓意的に示す《大エビとタコの戦い》とともに、饗宴空間を海と陸、闘争と支配という対となる2つの主題によって彩っていた。「ファウヌスの家」の装飾は、有名な《アレクサンドロス・モザイク》をはじめ、「異国との闘争とその支配」を中心的なテーマに据えて組み立てたと考えられる。